CATCH

‘キャッチ’

vol.107
2025. 3

西東京市図書館

私の心のおまもり

『にんきもののひけつ』

森絵都／文　武田美穂／絵　　童心社

小学生のころ、学校の図書室が大好きでした。まだ漢字も読むことができない、１年生のころからです。当時、『かいけつゾロリ』がとにかく流行っていました。私も流行りに乗りたくて、毎日のように図書室に行きましたが、さすがにんきもの。ゾロリの棚はいつも空っぽになっていました。そんなゾロリの戦いにやぶれた私の目に入ったのが、この本です。

同じクラスのこまつくんは、バレンタインデーに 27 こもチョコレートをもらっていました。でも、ぼくはたった１こだけ。このふこうへいはなんなんだ！じんせいにいやけがさしてきたぼくは、こまつくんの「にんきのひけつ」を探ることにする、というお話です。

当時の私も、「ぼく」みたいに「じんせいにいやけがさして」いました。だって、かいけつゾロリは借りられないし、友達はなかなかできないし、背だって学校で一番ちっさいし。どうにもならないけれど、納得もできない。そんな私のモヤモヤした気持ちを

代弁してくれたのが、「ぼく」だったんだと思います。細かいことは覚えていませんが、とにかくおもしろくて、何度も何度も読みました。この本をきっかけに、私は本を読むのが大好きになりました。

本を手に取ると今でも、あの頃の気持ちを思い出して、あたたかい気持ちになります。私の原点として、大切にしたい１冊です。

『麦本三歩（さんぽ）の好きなもの』

住野よる／著　幻冬舎

住野よるさんのお名前を一度は聞いたことがある方は多いのではないでしょうか。映画にもなった『君の膵臓（すいぞう）をたべたい』がベストセラーになった方です。図書館や学校の図書室で住野よるさんの多数の本を見た経験もあるのではないでしょうか。

「住野よるさんの本を読んでみたいけど、何から読むか迷う」という方や「長編小説を読むことは苦手意識がある」という方におすすめしたいのが、この『麦本三歩の好きなもの』です。

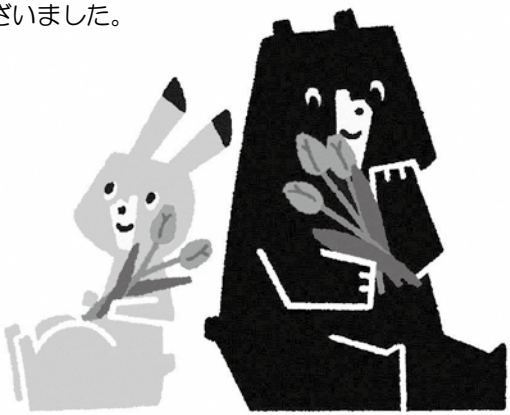
大学内の図書館司書として働く主人公の三歩が、好きなものに囲まれながら過ごす日常が描かれた連作短編小説です。三歩を一言で表すなら、自分で自分の機嫌を取れる人かもしれません。１２個の三歩の好きなものは、読者の方の好きなものと共通していて親しみを感じられるかもしれません。私も三歩と同じくお菓子が好きです。本を読ん

でいて登場人物と共通点を見つけることができると嬉しくなる人も多いのではないでしょうか。三歩は何が好きかぜひ、みなさんで探してみてください。

三歩の日常は楽しくて穏やかだけではありません。仕事中にハプニングに合い大変な目に合う日もあります。図書館の利用者たちや個性豊かな先輩たちとのやり取りは、三歩にとっては大変な時もありますが読者にとっては笑いを誘うシーンばかりです。しかし、三歩はひどく落ち込んだり、誰かに怒りをぶつけたりすることはありません。私は落ち込むと引きずってしまう性格なので、三歩の人柄を尊敬します。みなさんも温かい人柄の三歩に会いに行ってみてください。

「無意味に散歩出来る人こそが価値のある人間なのだと。」この言葉は三歩が気に入っている言葉として作中に出てきます。この言葉のように、この本の中にはたくさんの素敵な言葉が散りばめられています。短編集なので通学時の電車の中や就寝前等に気軽に読むことができます。

最後に、私がＣＡＴＣＨ共同編集者としての活動することは今回が最後になります。私の紹介したものがきっかけで、視野が広がり新しい本と出会うことができたらうれしいです。１年間ありがとうございました。



『星の王子さま』

サン＝テグジュペリ／著　内藤濯／訳　岩波書店

子どもの頃、実家の本棚はカオスでした。両親とも読書を好むタイプではなかったので、どこかでなんとなく手に入れた感のある、テーマの定まらない本たちが、読み手のつかないまま置かれていました。埃（ほこり）をかぶった世界文学全集、（おそらく）訪問販売の人から購入した漫画日本の歴史、釣りやマージャンの指南書、昔話題になった写真集など。

そんなある日、その本棚の片隅で見つけたのは『星の王子さま』という物語でした。装丁（そうてい）には可愛らしい子どもの王子さまが描かれ、薄めの本でしたので、手に取って見ると、小学生だった私の手にすっぽりと収まるのでした。

「ああ、やっと読める本を見つけた！」それは砂漠に不時着した飛行士が、別の星からきた王子さまと出会う物語で、実は残念ながら子ども向けのお話ではありませんでした。でも、この本が気に入ったので、自分の勉強机の棚にしまい、その 15 年後に一人暮らしを始める時の引っ越し荷物にも入れました。今も手元にあるその本、薄汚れた表紙はもうそれほど可愛くはないけれど、そっと私の心を温めてくれます。

『星の王子さま』は世界中に星の数ほど出版されていますが、私の「お守り」は、読書好きでない両親の本棚にあった、この本だけ。あの砂漠にいた王子さまにとっての「バラ」と同じです。もしどんな意味か知りたい方がいたら、この本を手に取ってみてくださいね。

『楚漢名臣列伝』

宮城谷昌光/著　文藝春秋

本書は古代中国、楚漢戦争時代を舞台として、その中で活躍した人物に各々焦点を当てる形で描かれた、いわゆる「歴史小説」です（楚漢戦争時代は年代にすると紀元前206年～202年頃、『キングダム』で有名な秦の時代の少し後です）。

限られた時代からピックアップされた 10 名の人物は、中国史小説の名手である著者の手によっていずれも魅力的に描かれており、冒頭には著者の手によるわかりやすい時代の解説も据えられていることから、この時代に詳しくない読者でも歴史小説の世界観に没頭できるようになっています。

「歴史小説」は定期的に話題になる時代小説とも異なり、歴史上の出来事をつぶさに反映したものであるため、伝統的に年配層の教養といったイメージが根強い分野であり、このCATCHの中でもあまり紹介されていません。私自身もそういったイメージがあったため、昔は興味の対象にも入っていませんでした。しかしそれだけに、高校生時に漢文の授業をきっかけとして初めて読んだ本書の面白さには衝撃を受け、遂には私の進路すらも決定づける「心のおまもり」となりました。

世の中には多くの本が存在しています。あなたの終生の「心のおまもり」となるのは今あなたが手に取っている 1 冊かもしれませんし、あなたが今まで目も向けてこなかった棚に挟まった 1 冊かもしれません。本書の紹介もまた、そんな「心のおまもり」を見つけるにあたっての一助になれば、と思っています。

「にゃんこの目」　ー『きみの友だち』の中の１作品

重松清／著　新潮社

ハナちゃんは最近、遠くのものが見えづらくなることがある。だけど、これは目が悪くなった、というわけじゃない。それは、親友の志保ちゃんから、付き合い始めたクラスの男子とのデートを理由に、何度も映画を見に行く約束をドタキャンされたり、同じ理由で、その男子を好きだった他のグループの女子との仲が悪くなったり、志保ちゃんと仲が悪そうだから、「それならうちらのグループに入らない？」と誘われたり…。そんな時に「発作（ほっさ）」のように起こる。物の厚みが感じられなくなって、みんなぺらぺらの画像みたいに見えてしまう感じ。

どんどん発作がひどくなって、もう限界って時に、診察してもらった眼科の先生が「これを試してみてください」と差し出してきたのは、赤いフレームの眼鏡。恐る恐るかけてみると、目に映るものすべてが、くっきりと見えるようになった――。

ここまで読めば、単に眼鏡のおかげで目が見えるようになったのかな、と思うかもしれません。しかし渡された眼鏡はなんと伊達（だて）眼鏡、つまりレンズはただのプラスチックだったのです。ハナちゃんにとって「発作」がどれほど辛いものだったのか、なぜ伊達眼鏡をかけただけで目が見えるようになったのか、お話を読んで確かめてください。

この本は、他にもたくさんの登場人物たちの視点で、本当の「友だち」とは何か、それを見つめようとしています。これを書いている僕も、男子校に入学した３年間、ずっと周りの子たちになじめず、そのことばかり考えていました。でも今となっては、自分にとって何が大切か、少しわかってきたような気がします。

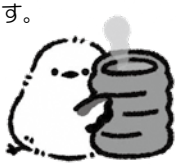
僕もハナちゃんと同じように眼鏡をかけていますが、作中のハナちゃんの言葉がずっと心の中に残っているので紹介します。　「度のついていない眼鏡越しに見る教室は、ナマで見るときと同じようにぼやけて、同じように薄っぺらだった。でも、眼鏡を間に挟んでいるぶん、水族館で魚を見ているときみたいに、『観察』の気分になれる」

YA！YA！ひろば

読者のみなさんがポストに投稿してくれたYA！YA！ペーパーを紹介します。

昔のアニメ・ラノベも
良いですよね。
私も『傷物語』は大好き
です。
（アオイ）

今回はひばりが丘図書館への投稿でした！みなさんの投稿、いつでもお待ちしています。



共同編集者のつぶやき

～編集後記に代えて～

まもなく春休み！新しい出会いにドキドキしているころでしょうか。すてきな春を迎えてくださいね！

①ペンネーム
②近況報告
③春の一曲

① とろろらいおん
② ２月に誕生日を迎えます
③ YUI CHE・R・RY

① アオイ
② 後悔なき新生活を迎えるべく、部屋の片づけや遊びの計画に忙殺されています
③ EGOIST「咲かせや咲かせ」

① ブロッコリー
②入試に向けて奔走してます。他のことが疎かになりまくってるのが申し訳ない…
③「春風の中で」合唱曲です。約２年ほど前に当時の部活の先輩と雨桜の下で歌ったことが思い出すぎる一曲なので…（他にも思い出詰め詰めの曲。）